

巻頭言



附属学校教育局長 石隈利紀

TOSHINORI ISHIKUMA

### 多様な学校群…「のりしろ」をもつこと、「組み合わせ」を試みること

筑波大学には11の附属学校がある。小学校、中学校、高校、そして視覚・聴覚・知的障害・肢体不自由・自閉症の特別支援学校と、多様な教育機能をもつ学校群である。11の学校には豊かな伝統があり、先進的な教育がある。それぞれの学校の特色や強みは、『日本の教育を拓く—筑波大学附属学校の魅力』（晶文社）に明確に描かれている。次の課題は11の学校が、お互いの重なりと違いを活かして、附属学校あるいは筑波大学全体として、全国的にも、国際的にも学校教育に貢献することである。その鍵を握るのが、「のりしろをもつ」ことと「組み合わせを試みる」ことである。例えば、視覚特別支援学校と高校が数学教育で連携する。数学教育の内容は重なるところが大きいだろう。重なりに着目することで、一緒に授業を行うことができる。また、異なるニーズに応じる教育方法に着目することで、互いに学びあえる。例えば、視覚障害のある子どもには、授業で教師が使うことばの最大限の工夫により、子どものなかに形や図のイメージを作る。一方高校の教師の板書や資料には、教育方法の工夫がこらされている。互いの教育方法から学ぶことが大きい。多様な11の附属学校が共同で新しい学校教育を創っていくためには、重なりを見つける「のりしろ」を持ちながら、違いを尊重し「組み合わせ」を試みるのである。余談であるが、2009年1月20日アメリカの大統領に就任したオバマ氏は「一つのアメリカ」を強調している。「多文化」を尊重した交流を工夫しながら苦戦しているアメリカの人々は、アメリカ合衆国という一体感をもつことで、明日に向かう力を得たのだと思う。

目次	
■巻頭言	多様な学校群…「のりしろ」をもつこと、「組み合わせ」を試みること・石隈利紀
■先端的研究	学校教育の先導的な役割を推進する、附属学校の取り組み!.....1 附属高等学校●鎌倉芳信 附属駒場高等学校●梶山正明
■研究交流セミナー報告	平成20年度障害科学系研究交流セミナー●藤原義博.....2
■メッセージ	附属学校との6年間●谷川彰英.....3
■科学の芽賞	第3回「科学の芽」賞の授賞式・発表会開催!●小林 汎.....4
■温故知新	「教育は人なり」の精神を受け継ぐ●小林美智子.....4
■附属の今	附属の今(附属大塚特別支援学校)●神田基史.....5
■新人教員奮闘中	よりよい授業をめざして●梅澤真一.....5
■TOPICS	2008 北京オリンピック・パラリンピック筑波大学報告会●角田陸男.....6
	●広報誌名「ポローニア」の由来 「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。



### 学校教育の先導的な役割を推進する、附属学校の取り組み!

本学の附属学校は、我が国を代表する実験学校として長い歴史を刻んできた。  
今なお、我が国の教育をリードするための  
研究と実践を世に問い、貢献することが求められている。

#### 世界に開かれた附属高校に向けて

附属高等学校 副校長 鎌倉芳信

附属高等学校は昨年、附属中学校とともに創立120周年を迎え、10月10日(金)に岩崎学長はじめ多くの来賓を迎えて記念行事を行った。また翌11日には同窓会主催でホームカミングデーが行われ、学校は1000余名の参加者で賑わった。

明治21年の創立以来、本校は独創的な修学旅行や林間学校また公開授業研究など、優れた先導的教育を積み重ねてきた。120周年を迎えた現在もその伝統の上に様々な新たな先進的教育実践を行っている。その一つに国際理解教育がある。シンガポールのHWA CHONG INSTITUTIONを会場に、インド・中国・サウジアラビア・マレーシア・オーストラリア・アメリカ・イギリスなどアジア諸国を中心に10数カ国の若者が集って行われる「アジア太平洋青少年リーダーズサミット」に毎年3名の生徒を派遣している。このサミットは、アジアの将来のリーダー、ネットワーク作りを目的としたもので、環境問題他いろいろなテーマを英語で討論し、共同体験をするというもので、昨年夏に3回目を終えた。参加生徒はいずれも自分の視野を広げる貴重な国際理解体験をしている。

また、中・高二つからなる名門校HWA CHONGとは、サミットとは別に相互短期留学を行っている(昨年からは附属中学校もこれに加わった)。約1週間それぞれ相手校の英語、日本語による授業に直接参加し、生徒間交流、ホームステイを通して、相互のライフスタイルや文化を学んでいる。昨年の11月にHWA CHONGから来日した生徒は8名(1名は附属中学校)で、授業の他、生徒会主催の交流会や茶道部主催の茶会、また先のサミットや短期留学を経験した卒業生の引率による都内研修などが行われた。附属からは今年3月末にシンガポールを訪れることになっており、HWA CHONGとの交流はもちろん、女子の名門校NUN YANG女子中高との交流や附属の引率教員による授業などが計画されている。



#### 駒場の新しいSSHは「教え合い学び合い」へ

附属駒場高等学校 教諭 梶山正明

最近の本校では、小学生といっしょに中学・高校生が観察・実験に取り組む授業や中学生が高校生のゼミナール(総合学習)に潜り込んで参加する授業、中国の高校生と英語で議論しあう研究発表会など、学年や学校そして国境まで越えた交流が盛んである。これは、平成14年度から5年間にわたり、先進的な教材開発に取り組んできたスーパーサイエンスハイスクール(SSH)が一段落した後、平成19年度から始まった新しいSSHによる取り組みの一端である。

新しいSSHの研究開発課題は「国際社会で活躍する科学者・技術者を育成する中高一貫カリキュラム研究と教材開発—中高大院の連携を生かしたサイエンスコミュニケーション能力育成の研究—」といかめしいが、要するに生徒のもつ優れた資質を互いの教え合い学び合いによってさらに磨き、サイエンスコミュニケーション能力を高め、より主体的な学習を重視していこうというねらいである。

具体的には、高校3年生が半年以上かけて取り組んだ卒業研究を後輩や外部の生徒・先生方に向けて発表し議論するテーマ研究発表会(この発表会は、企画・運営も生徒の組織を主体に行った)、目黒区立駒場小学校や本校で“レゴ”同好会や化学部、生物部などの生徒が小学生といっしょに数学を学んだり、理科の観察・実験を行ったりする「サマースクール」「筑駒アカデミア」、中学生が高校生のゼミナールに参加する「テーマ学習・ゼミナール同時開講」「ゼミナールオープン」、高校生による“International StudentsScience Fair”(立命館高校主催)への参加・発表や北京師範大学附属実験中学との交流による研究発表会など、さまざまな取り組みが行われている。今後は、同じ附属どうしの研究交流などもできればと期待しており、この新しい取り組みについて、さまざまなアイデアやご助言を賜れば幸いである。



駒場小学校サイエンススクールで電池のしくみを学ぶ本校化学部員と小学生